

中川吉晴著『ホリスティック教育講義』 出版館ブック・クラブ (2020)

村上 祐介 関西大学文学部総合人文学科*

Nakagawa Yoshiharu, *Holistic Education*
MURAKAMI Yusuke

本書の成り立ち

本書は、ホリスティック教育の思想や実践について、トランスパーソナル心理学や永遠の哲学の立場を中心に考察された学術書である。また、当該学問領域の近年の知見や、主要な理論家・実践家の動向についても幅広く解説されており、書名が示すように、ホリスティック教育について体系的に学ぶための必須テキストである。

著者の中川吉晴先生（同志社大学社会学部教授, Ph.D.）は、『Education for Awakening』や『ホリスティック臨床教育学』等、ホリスティック教育分野における重要な業績を数多く残されてきた。また、現在、日本トランスパーソナル心理学 / 精神医学会会長、日本ホリスティック教育 / ケア学会副会長、『Holistic Education Review』誌の編集委員等、関連学会の重役も兼任されている。まさに、この領域における泰斗のお一人である。

ホリスティック教育は、1980年代に北米で登場し、1990年代より日本に紹介され、「地味ながら着実な歩み」（p. 343）を続ける教育体系である。その特徴は、「物質主義的で機械論的な世界観によって立つ現代教育に対して、ホー

リズム（全体論）の観点から、断片化された生を統合し、存在の全体性を回復すること」（p.2）に重きを置いた教育思想・実践にある。本書は、中川先生のホリスティック教育論において中核的な役割を担う「気づき（の技法）」に軸足を置きながら、ホリスティック教育とは何であるかを、古今東西の優れた実践モデルや思想をとりあげ詳述している。以下、その概要を追ってみよう。

各章の概要

第1章では、ホリスティック教育や、関連領域であるスピリチュアリティ教育、観想教育、インテグラル教育について、近年の動向を踏まえた歴史的展開が概観されている。特に、『ホリスティック教育インターナショナル・ハンドブック』の刊行（2018年）、「教育におけるスピリチュアリティ共同研究センター」（コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ）の設立、「アジア太平洋ホリスティック教育ネットワーク」の発足（2013年～）、『子どものスピリチュアリティ国際ジャーナル』の創刊（1996年～）等、当該領域において信頼性の高い学術コミュニティの情報が網羅されており、後学の確かな道案内となっている。

また、マインドフルネスを含む観想教育（contemplative education）についても、教師教

* y_mura@kansai-u.ac.jp
関西大学文学部総合人文学科
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

育に果たす役割や各国での取り組みが紹介されている。ホリスティック教育では、近年のマインドフルネス・ブームに先駆けて観想実践が重視されてきたが、その志向性は、昨今の潮流と若干の違いがあるという。具体的には、観想実践を、「身心の健康に役立つだけでなく、永遠の哲学の観点から見て、個人のスピリチュアルな発達にも資するもの」(p. 20) と見なし、これを通じて「トランスパーソナルな気づきの意識を十分に確立し、気づきにセンタリングする(中心を置く)」(p.34) ことを目指している。

第2章では、ホリスティック教育の中心的人物であるジョン・ミラーの業績が紹介されている。ミラーの教育観の特徴は、断片化・細分化された近代の教育の課題を受け、あらゆるものつながり (interconnectedness) の回復や創出を重視することにある。また、ミラーは、従来の様々な教育に通底する世界観や信念体系を整理し、その立場を、「伝達」(細分化された知識や技能の伝達)、「交流」(問題解決や知的探究)、「変容」(自己超越や社会変容) に大別している。ホリスティック教育では、「変容」の立場が相対的に重視され、具体的な実践カリキュラムとして、「直観とのつながり」「身心のつながり」「教科のつながり」「コミュニティとのつながり」「地球とのつながり」「魂とのつながり」が提唱されている。

特に、第2章で興味深いのは、カナダのトロントに開設された、公立校としては初となるホリスティック教育校の実践が紹介されている点である。エクイノックス・ホリスティック・オルタナティブ・スクールという名を冠したこの学校は、上述したミラーのヴィジョンに基づくカリキュラム設計が行われている。身体、精神、スピリットを含んだ「全体としての人間」(whole person) を育む学舎が、具体的にどのように運営されているのか、その一端が描写されている。

続く第3章では、タイの代表的なオルタナ

ティヴ・スクールの一つであり、仏教を基盤とした独自性の強い教育を展開しているルンアルン・スクールの実践に関する分析が行われている。ルンアルンは、知識の伝達に終始する旧来の教育を脱却し、社会的問題の解決に貢献できる「未来に生きる人のための教育」を追求し続けている。その特色は、実生活の課題解決に焦点を当てた経験重視の「プロジェクト学習」や、子どものみならず教師や保護者も積極的に取り組む「観想実践」にある。

中川先生は、これらの取り組みを、上述したミラーの枠組みや、仏教教育哲学(三学、善友と如理作意、四念処)の観点から緻密に分析するとともに、アジア圏を中心とした仏教系学校への示唆や、仏教概念を脱構築した上での一般化可能性について論じている。これまで第三者による分析がほとんど行われなかったルンアルンについて、極めて貴重なフィールドワークの成果が提示されていると言えよう。「オルタナティブ」でありながら、「国家の教育方針と何ら異なるものではなく、むしろ教育改革の目標を先取りし、それを高度に達成している」(p.120) 優れた教育モデルに、刺激を受ける教育関係者も少なくないはずだ。

以上が前半の構成になるが、特に第2、3章を通じて明らかにされた、ホリスティック教育を主体とした-既存の教育への部分的な援用という形ではなく-学校経営の事案は刮目に値する。これは、ホリスティック教育領域の発展を考えるうえで非常に重要な動向である。対外的な視点では、近い将来、子どもの学習面あるいは心理社会面のアウトカムへの効果検証が進めば、ホリスティック教育の有用性を、より説得力のある形で社会とコミュニケーションすることにつながるだろう。無論、拙速な調査を重ねることは避けられるべきではあるが、公教育に様々な綻びが散見される現代にあって、オルタナティブなホリスティック教育のもたらす恩恵

が明確になることの意義は大きい。一方、対内的な視点では、既存の理論や実践体系の省察を促進する契機となり、それらをブラッシュアップさせていくことにもつながるだろう。それは、ホリスティック教育コミュニティ内の活性化をもたらすはずだ。

以降、本書の後半では、ホリスティック教育の方法原理についての論考が展開される。第4章では、トランスパーソナル心理学と関わりの深いヒューマン・ポテンシャル・ムーブメントに多大な影響を与えた、オルダス・ハクスリーの教育論が描写される。ハクスリーは、「古今東西の叡智の伝統に共通して見られる神秘主義的な中核思想」（p. 164）である「永遠の哲学」（perennialism）を論じ直したことで知られる。永遠の哲学では、「世界の究極的なリアリティは『神的基盤』とみなされ…人間の究極の目的は、この神的基盤を知ることである」（p. 165）と考える。中川先生は、永遠の哲学を基盤に据えたハクスリーの教育思想（永遠の教育）に関する先行研究が少ないことを踏まえ、全体像を体系的にまとめている。その特徴は、悟り、すなわち私たちが潜在的可能性を実現する（＝自分が本当は誰なのかを知ること）ために、多次元的な気づきの技法を中心とした教育を通じて、意識の拡大を推進しようとしていた点にあると言えよう。

第5章では、ホリスティック教育の方法論に関する独自の論考が展開されている。中川先生は、シュタイナーやグルジェフ、トランスパーソナル心理学等の意識論を参照しながら、ホリスティック教育論の方法原理を導く人間観として、「人格」、「気づき（魂）」、「かぎりない純粋な気づき（スピリット）」を想定する。人格は、身体（body: 感覚や運動）、心（heart: 情動・感情や社会性）、精神（mind: 認知や思考）から構成され、各自の実存的な基盤である個性をもたらす。気づき（awareness: 魂）は、「自分の

内外でいま起こっていることを意識し、それに細かな注意を向けること」（p. 236）であるが、これは、感情や思考、意志といった心理的機能に含まれるものではない。さらに、この気づきの深まりは、究極的リアリティである純粋で非二元的な気づきの覚醒へとつながる。

中川先生は、こうした人間の存在様式に呼応させる形で、ホリスティック教育の基本原理を、「人格のそれぞれの次元にかかわる方法（身体的、感情的、認知的な諸方法）を取り入れ、さらに人格を超えるトランスパーソナルな観想的方法を組み合わせる」（p. 234）ことだと述べる。したがって、ホリスティック教育とは、「人間が多次元の統合を実現し、そのようにして存在の全体性を生きることを探究するもの」（p. 265）であり、「この現実世界の中で、有限な人格と無限な意識を統合した存在として創造的に生きていくこと」（p. 265）を助けるものである。さらに、中川先生は、パーソナル次元からトランスパーソナル次元へ、そして、トランスパーソナル次元からパーソナル次元への「往還運動、向上・向下の運動の全体がホリスティック教育の道」（p. 267）であるとも主張する。特にこの主張は、ホリスティック教育を、身心技法を組み合わせた静的なパッチワークとしてではなく、人間の限りない成長を支える動的な営みとして捉える上で、重要な視座をもたらしている。

続く第6章は、第5章で整理された方法原理を反映し、中川先生の取り組みをはじめ、ホリスティック教育の実践例が報告されている。具体的には、センサリー・アウェアネス、ノートタイム・アサインメント、あなたはいまどこにいるのか、サイコシンセシス、イメージワークなどである。具体的な講義録やワークの手続きも紹介されており、ホリスティック教育の実践者にとって有用な情報が提示されている。

以上、第4～6章では、本書の中核的なテーマである「永遠の哲学」と「気づき」の思想や

方法論が詳細にまとめられており、近年流行するマインドフルネス等の観想的な実践が、何を目的に、どのような背景で生じたかを整理するための一つの視座を提供している。マインドフルネス研究が興隆した背景の一つには、宗教的文脈を切り離したことが挙げられるが、近年では、例えば仏教の倫理的指針や倫理実践等の観点から、脱宗教化の是非について議論が展開されている(砂田, 2022)。本書もまた、観想実践に含まれるトランスパーソナルな特徴を描き出しており、読者は、観想実践が学習者にもたらす潜在的なインパクトについて思索を深めることになるのではないだろうか。

最終章では、喫緊の教育課題の一つである「いじめ」についての論考が展開される。中川先生は、いじめに対する制度的取り組みの必要性を認めつつ、いじめも含め暴力の絶えない世界の中で、個々人がどのように生きていくか、という実存的な課題に当該章の論点を絞っている。その主旨は、個人が、集団にとらわれることなく、他者(の評価)に支配されない「私」を見つること、すなわち「独り(aloneness)」でいられる生き方を重視することである。また、このような、内なる集団からの脱同一化には、自分に生じる多くの反応を観察し、手放すための気づきが肝要になる。そのようにして独りになった際、私たちは他者(偉大な先人、物語内の存在、作品等)に出会うことで、自分の潜在的な可能性を発見できる、という。そのため、大人に求められるのは、「恐れることなく独りになり、自分の世界をつくってもよいというメッセージを伝え、至高なるものとの出会いの可能性を開き、子どもが自分の道を見つけられるように助ける」(p.339) ことである。

本章の主張から喚起されるのは、トラウマ的な出来事に苦悩した末、個人が経験するポジティブな変化を意味する心的外傷後成長(Posttraumatic growth: PTG; Calhoun & Tedeschi,

1999) である。PTGには、他者との関係、新たな可能性、人間としての強さ、精神的変容、人生に対する感謝が含まれるが、いじめ被害からPTGに至る過程には、「安全」(ありのままの自分を受け入れてもらう、好きなことに熱中して他のことを考えない等)や「開示」(体験の言語化)、「切替」(気持ちや考え方、価値観の変化)といった、つらい体験からの成長が媒介することが明らかになっている(長田・相澤, 2021)。いじめ被害の体験を糧に、子どもが自分の人生を歩んでいくためには、苦悩を受け止めてもらいながら、安心して世界を探索できる居場所が助けになる。したがって、援助者にはそうした居場所を提供できる力量が求められている、と言えよう。

まとめ

300ページを超える本書には、上記の如く、ホリスティック教育の真髄を学ぶために必要な高水準の知見が集約されている。僭越ながら申し添えることをお許し頂けるなら、これらの内容は、緻密な文献研究やフィールドワーク、明晰で一貫性の高い論考に支えられている。また、ホリスティック教育の歴史と共に歩み、当該領域の一流の研究者・実践者と連携され続けてきた中川先生だからこそ、記すことのできた学術的価値の高い情報も多分に含まれている。「ホリスティック教育は何よりもまず思想や理念であるといった特徴づけがなされる」(p.211)が、中川先生は、「気づき」を一本の軸としながら、理念の概説に止まらず、具体的な方法原理や実践形態にも十分な言及を行い、読者の理解を深めることに成功している。

本書は、ホリスティック教育やオルタナティブ教育に関心のある方にとっては、当該領域の学術的な進展を把握することに寄与するだろう。また、マインドフルネスをはじめとした観

想実践を教育現場に導入している対人援助職の方にとっては、自らの実践が、何を意図するもので、どこまでの範囲で他者の成長を助けようとしているものなのかを整理することに役立つものと思われる。無論、人間の発達や成長に関心のある全ての方にとって、教育の可能性について一考するのに有益な著作である。

引用文献

- Calhoun, L. G., & Tedeschi, R. G. (1999). *Facilitating posttraumatic growth: A clinician's guide*. Routledge.
- 長田 真人・相澤 直樹 (2021). いじめの長期的影響-体験への意味づけとしての心的外傷後成長に注目して- ストレスマネジメント研究, 17(1), 60-68.
- 砂田 安秀 (2022). マインドフルネスと倫理 心理学評論, 64(3), 363-383.